

セカンドキャリアとしての弁護士生活

会員 生井 みな絵

1 弁護士以前

私は、大学卒業後、公立小学校の教員として、毎日何十人もの子どもに囲まれて働いていた。「担任している子どもを相手に授業をする」「担任するクラスで起こる様々な出来事を子どもと一緒に乗り越える」ことは、おそらく、世間一般で考えられているよりもずっと面白く、また、創造的な仕事であり、私は自分の仕事が好きだった。

しかし、自身の3人目の出産を契機に、思うところがあり、働きながら夜間法科大学院に通い始め、司法試験に合格すると、修習開始前日に退職した。

2 セカンドキャリアの悩み、強み

東京での修習に参加して驚いたことの一つは、思った以上に、年齢を重ねたセカンドキャリア修習生がいたことだ。前職は様々で、金融機関、IT企業、官公庁、他業などなど・・・さすがに元小学校教員には出会わなかったが、皆さん、それぞれに信念があるからこそ、決して簡単ではない道を選んだことが感じられた。

弁護士登録してから約半年が経過したが、やはり、中年になってから全く新しい世界に飛び込むのは、大変である。相応の覚悟はしていたけれど、できないこと、分からないことだらけな上、失敗も多く、周りの方々に助けていただきながら、ゼロからスタートして積み上げていかなくてはならない。どうしても前職と比較してしまうため、これはなかなかのストレスである。

他方で、もちろん、セカンドキャリアであるからこそその強みもある。その最大のものは、何と言っても、

直接前職と関係のある案件を担当したときであり、このときの効果は足し算ではなく掛け算並みに、いろいろな解決策や事態の打開方法が見えてくると感じている。

例えば、私は、子どもの人権と少年法に関する特別委員会に研修員として所属しているので、先日、いじめ予防授業を担当する機会があった。このときは、指導案作成から板書計画、発問の仕方、授業での子どもの反応に対する声のかけ方など、前職で身に付けた特殊技能を使い、委員会がいじめ予防授業に込めた趣旨に沿う授業になるよう工夫ができた。自分の得意な分野で子どもと関わることができ、楽しかった。

また、間接的ではあるが、事実関係・主張を文書にまとめる際や、依頼者とのコミュニケーションの中でも、前職での経験が活かしているなど感じることもある。どんな仕事に就いたとしても、社会人として共通に求められるスキルがあることが、改めて実感できた。

3 新人弁護士としての抱負

世の中には数えきれないほどの分野があり、どの分野に目を向けたとしても、そこには必ず法律問題がある。前職で経験した教育、子どもに関する分野はもちろん、これまで縁のなかった分野についても勉強をして、自信をもって取り組めるように努力していきたい。

そして何より、心身ともに健康で、前職以上にこの仕事を続けていけるようにしたい。そのためには、最近すっかり足が遠のいてしまっているフィットネスジム通いを再開し、筋肉をつけて基礎代謝を上げていこうと思う。